紀　　要

第 15 号

2002. 3

財団法人滋賀県文化財保護協会

小松古墳から見えてくるもの

細　川　修　平

1．はじめに

高月町古保利古墳群は、古墳創出期の問題を考える時、無視できない存在である。特に、その中の1基、墳長59.7 mの前方後方墳である小松古墳からは、大量の土器類とともに豊富な副葬品が出土し、琵琶湖地域のみならず、畿内地域と東海・北陸地域とを結びつける接点として、古墳創出の問題に欠くことのできない地位を占めている。

小松古墳をはじめとする、平成11年度からの古保利古墳群の確認調査については、すでに報告書[(1)]が刊行され、多岐に渡る問題点が論じられている。詳細は、報告書に従うべきものと考えているが、ここでは、年代的位置付けの問題に対して若干のコメントを行うとともに、その副葬品の一つである鏡面を中心に、古墳創出の問題および当該期の琵琶湖地域の状況について、若干の考察を行いたい。

2．小松古墳の概要と編年的位置付け

小松古墳は、墳長59.7 m、後方部長37m、同幅29 m、同高5.4 m、前方部長23m、同幅22 m、同高4.15 mの前方後方墳で、外部施設は確認されていない。

埋葬主体は、盗掘により完全に破壊されていたが、石材および粘土を用いるタイプではなさそうである。盗掘坑から、鏡面2面のほか、銅鏃、鉄鏃、刀子、ヤス、赤色顔料などの遺物が出土している。破片化したものが大半で、本来的な数量、形状が不明なものが多い。これらについては、本来主体部に納められていた副葬品群の一部であると考えて大過ないであろう。ただし、これらが単独の主体部に納められていたかについては保留しておきたい。いずれにしろ、刀剣類の副葬は確認できなったものの、この組み合わせは成立期の前方後円墳の副葬品の基本（鏡面・武器・生産用具）に則ったものであると認められる。

墳頂部では、さらに2基の土坑が確認されている。いずれも埋葬儀礼（＝供食儀礼）で用いた土器類を廃棄したものと考えられ、大量の土器類で充填されていた。盗掘による破壊および確認調査と言う性格上、埋葬儀礼で用いられた全ての土器類が復元されたものではないが、壺類を中心に、高坏、甕等からなる組み合わせである。この中に、特殊器台・特殊壺は含まれない。

さて、こうした内容を持つ小松古墳の築造年代については、上記の二つの土坑から出土した土器類の分析からなされるのが一般である。そして、検討者によって多少の前後はあるようであるが、報告書においても採用されている「布留式並行期以降にはなり得ない。庄内式の後半頃」と言う結論が一般的なようである。そしてこの年代観から、小松古墳は前方後円墳成立以前、すなわち「墳丘墓の段階」の所産として扱われることが多い。

さて、筆者は、土器類の検討のみから小松古墳の年代を決定する方法には、なお慎重になるべきと考える。すなわち、確認調査と言う制約や盗掘の影響から、今回の小松古墳の確認調査においては、年代決定の根拠とされる土器群が出土した二つの土坑の詳細な性格、二つの土坑の関係などが明らかにされていない点、それぞれの土坑および想定される埋葬主体との関係が明らかにされていない点、さらに複数埋葬の可能性についても明らかにされていない点など、この土器群のみで古墳の年代を決定することに若干の躊躇を覚えるものである。これに対し、その他の副葬品群は、基本的には前期初頭の古墳の組合せに従っている事実、そのなかでも、比較的精緻な形式変化の追える銅鏃が、古墳1期後半以降に出現する篦被付腸抉柳葉式銅鏃である事実を考慮するとき、[(2)]土器群の年代観から、小松古墳を定型化した古墳以前、すなわち前方後円墳以前とすることには、にわかには首肯し難いものとなってくる。また、土器自体に関しても、地元（湖北地域）における土器編年が十分に確立されていないと言う側面も事実で

あり、例えば小松古墳から出土している「受口状口縁甕」については、琵琶湖地域南部などの事例からは、「布留式」以降になる可能性も高いものとも認識できる。こうした状況から、土器類、特に特殊な壺類や手焙形土器を抽出して、これらを小松古墳の年代とすることには問題が多いと考える。

そこで筆者が注目する点は、前述の土坑から出土している土器類の内、壺類のほとんど、および、高坏の一部が焼成前底部穿孔となっている事実である。墳丘墓および前方後円墳祭祀に用いられる壺（特殊壺）を見たとき、当初は通常の壺であったものが、その後焼成後底部穿孔となり、向木見型特殊器台に該当する広島県矢谷墳丘墓[3]において底部穿孔壺が出現する。その後、岡山県宮山墳丘墓など宮山型特殊器台の段階には、ほぼ全て焼成前底部穿孔壺となるようである[4]。さらに、都月型器台形埴輪の段階では、器台から分離し、底部穿孔壺が単独でも用いられる例も認められるようになっている。また、特殊器台を伴わない場合においても、香川県鶴尾神社４号墳墓などが初現となるようであり[5]、特殊器台を伴う場合とほぼ同じ頃に出現するようである。さらに、奈良県ホケノ山古墳では、焼成後穿孔壺が主体部を取り囲んでいたようであり[6]、おそらくこの辺りの年代において、個別差を持ちながら焼成前底部穿孔壺が拡散していくようである。

この焼成前底部穿孔壺の出現は、単純な土器変遷にとどまる変化ではない。前方後円墳祭祀の一側面である円筒埴輪成立への第１歩と位置付けられるべき現象であり、まさに儀式化した「供食儀礼」の成立を示す、言い換えれば祭祀イデオロギー的側面に関する変化であると理解できる。従って、ほぼ全ての壺が焼成前穿孔となっている小松古墳の場合は、明らかに儀式化した供食儀礼の文化を受け入れたものとも理解でき、この意味からすれば、儀礼の定式化した宮山型特殊器台の段階以降の所産となる可能性が高いものと判断できる。ただし、小松古墳では

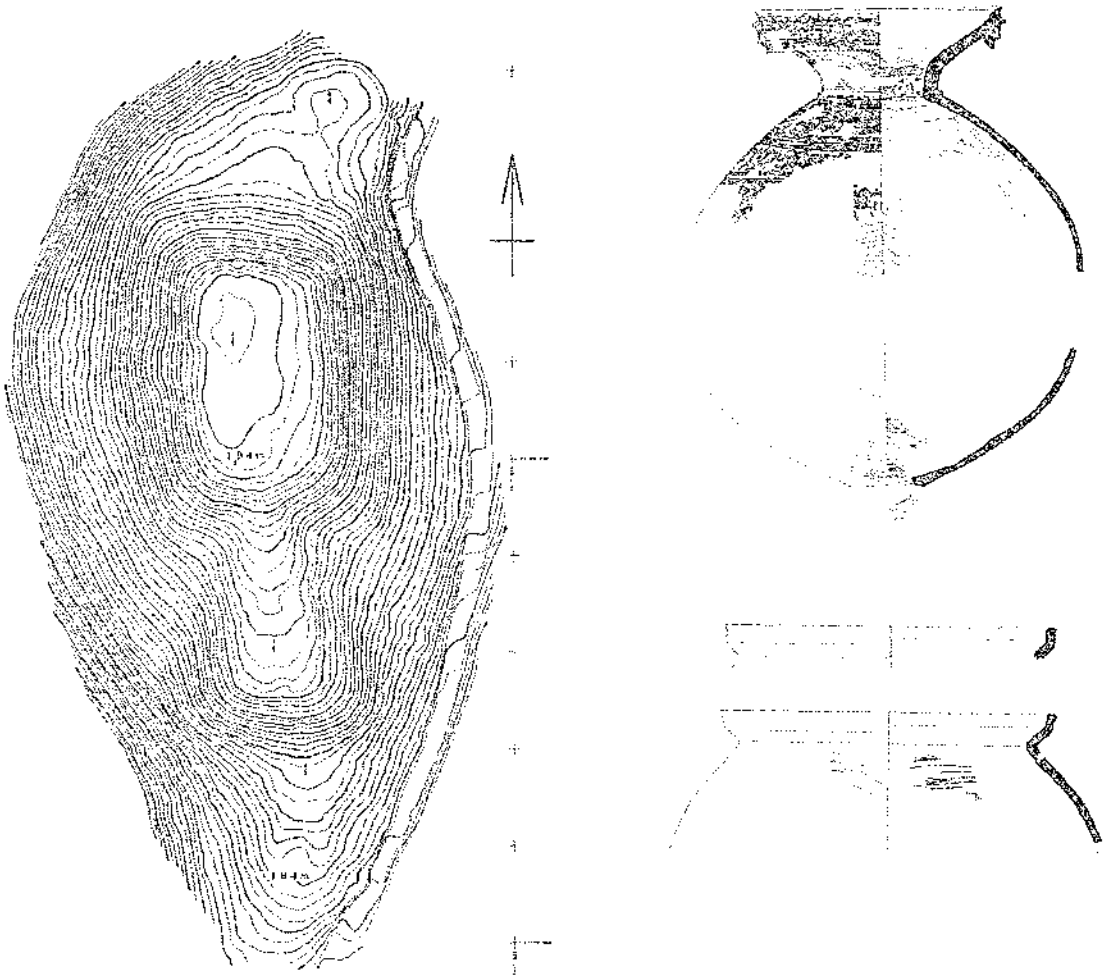

図１　小松古墳　墳丘測量図・出土土器実測図

壺形土器による方形囲繞は確認できておらず、このスタイルが一般化する奈良県桜井茶臼山古墳[7]の頃まで新しくなる可能性は低いと考える。

さて、宮山型特殊器台は、箸中山古墳や中山大塚古墳など、奈良県下の成立期前方後円墳に用いられる[8]、前方後円墳成立のまさにその段階に該当する遺物である。従って、この段階以降となる小松古墳は、明らかに前方後円墳成立以降の所産、すなわち、「前方後方墳」と認識されねばならない。

ところで、現時点においては、宮山型特殊器台を有する古墳から三角縁神獣鏡が出土した事例は無く、続く都月型円筒埴輪段階になって、兵庫県権現山51号墳で三角縁神獣鏡との共伴が確認されている。その他、古相の三角縁神獣鏡を出土する古墳においては、都月型円筒埴輪と共伴することもある壺形埴輪が出土する事例が多い。こうした事実関係から、宮山型特殊器台の段階においては、三角縁神獣鏡の配布・副葬は開始されていなかった可能性が指摘されている[9]。こうした文脈の中で、三角縁神獣鏡が出土しなかった小松古墳を、三角縁神獣鏡配布以前の一例に加えることは魅力的な仮設ではある。しかし、①盗掘のため、小松古墳における全ての副葬品が明らかにされた訳ではない点。②三角縁神獣鏡の配布が、必ずしも全ての古墳になされたものではない事実。に加え、三角縁神獣鏡の配布以前と言う「微妙な」時間幅に対し、小松古墳の年代観を特定することが可能かと言う問題が存在する。現状では、この問題に対し「不可能」と答えざるを得ない。ただし、予見的に述べれば、小松古墳出土銅鏃を倭王権からの配布威信材と考えれば[10]、配布威信材の最高峰に位置する三角縁神獣鏡が配布される段階以降、あるいは、すくなくとも三角縁神獣鏡に先立って配布された可能性も指摘されている画文帯神獣鏡が配布されている段階と考えられる。従って、盗掘と言う事実をどのように評価するかはともかく、小松古墳において三角縁神獣鏡も画文帯神獣鏡も出土していない事実は、十分に注意されてしかるべきであろう。

以上、小松古墳に関しては、定型化した古墳（箸中山古墳）以降と考えた。そこで、そこに副葬されていた鏡面から、さらに問題を追及することとする。

3．小松古墳出土の鏡面

小松古墳からは２面の鏡面が出土している。いずれも、盗掘孔出土の破片であり、本来的な副葬の状態などは明らかではない。以下、簡単にこの２面の鏡面を説明する。

内行花文鏡は、復元径 21cm 前後となる大型品で、平縁？四葉座八連弧文。「□宣□□」の銘文を有する。所謂「模糊鏡」であるが、文様が判読し難い程度のものではなく、特に雲雷文帯などは、良く残存している。破片の状態からは、本来的にも破鏡であったものか、盗掘時等に破片化したものかの判断は下せない。漢鏡５期[11]に編年できる伝世鏡である。

方格規矩鏡は、復元径 14cm 前後の中型品である。素文の薄い平縁で、Ｔ字および逆Ｌ字文は確認できるが、Ｖ字文は確認できない。主文は鳥文かと考えられる一部が認められるが、神像や獣文は明らかではない。銘文帯も存在するが、判読は不可能である。「模糊」が著しく、文様の判読も困難な程度であるが、部位による程度差は認められる。内行花文鏡と同様に、破鏡であったものか、破片化したものかの判断は下せない。文様等不明確なところも多いが、漢鏡６期前半に編年できる伝世鏡である。

さて、この２面の鏡面は製作年代に若干の差異が認められるものの、後述のように概ね紀元 100 年を前後する頃に日本列島にもたらされ、その後 100 年以上に渡り伝世した後、小松古墳に副葬されたものである。また、漢鏡５期および６期の鏡面は、福岡県平原遺跡など弥生時代における大量副葬事例の存在する九州地域を除けば、前期古墳から出土することが多く、さらに奈良県天神山古墳[12]や桜井茶臼山古墳など特殊な事例を除けば、同一墳墓から複数面出土することは異例である。従って、前期古墳でも初期の事例であり、しかも２面の副葬が考えられる小松古墳は、こうした意味からも極めて需要な位置に存在する古墳であると言い得るのである。

4．後漢鏡の流入と小松古墳

鏡面副葬において考えられた小松古墳の重要性を再確認する目的で、北近畿地方における後漢鏡（漢鏡４・５・６期）の出土状況を確認する。

北近畿地方では、当概期の鏡面が、破片を含めて

18面出土している。この状況を岡村秀典氏の全国集成[13]の結果に合わせて、どのように解釈するか、議論が必要となる部分ではあるが、筆者は決して少なくはない面数と理解している。さらに丹後から西方、鳥取県東部に漢鏡5期の鏡面のやや多い状況が見て取れ、これを含めて分布のやや集中するする地域(山陰－丹後地域）を形成していたと理解している。また、滋賀県下においてみれば7面出土している内で、5期（和邇大塚山古墳）および6期（岡山古墳）の盤竜鏡各1面以外の5面までが北部地域に集中しており、これは山陰－丹後地域に連続する琵琶湖地域北部における鏡面入手の優位性を示しているものと考える。

ところで、当該期の鏡面、特に漢鏡5・6期のものは、多くの場合古墳副葬品として出土し、そのため、これらの鏡面が伝製鏡か倣古鏡か、あるいは何処で伝世したのかなど、多くの議論を生む母体となっている。この議論は、弥生時代から古墳時代にかけての歴史像に大きく関わる部分である。最終的な結論は、個別の鏡面に立ち返って検討されねばならないが、ここでは当該期の鏡面に関する筆者の基本的立場のみ説明しておく。

①倣古鏡の存在[14]を否定するものではないが、所謂「模糊鏡」、特に部分差の激しい「模糊鏡」については、倭列島内の独特の使用が想定されることから、伝世鏡と考える。②岐阜県瑞竜寺山頂遺跡[15]の内行花文鏡例が示すように、弥生時代後期前半には漢鏡5期の鏡面が東海地域にまで齎されており、この段階には一定量が倭列島各地に流通した。③北部九州地域と瀬戸内東部地域、さらに大和地域に鏡面分布の中心が存在する。その他、上述の山陰－丹後地域にも多く分布する。④大和地域の分布の中心となる天神山古墳は、当該期の鏡面をモデルとした仿製鏡（倭鏡）の製作に深くかかわった被葬者が想定され[16]、特殊な条件下での鏡面の集積を想定する必要がある。⑤上記の倭鏡の本格的製作開始時は、古墳2期（以下、古墳を省略）の頃であり、古墳副葬品に碧玉製腕飾類が加わる段階とほぼ一致する。⑥碧玉製腕飾類が古墳副葬品に加わる背景には、九州地域、中でも北部九州地域の首長層が本格的に「前方後円墳秩序」に参与した事実を表現する。⑦その過程において、碧玉製腕飾類の祖形である貝製腕飾類を中心に、北部九州から大和地域に向けて、あるいは双方向の『人、物、情報』の交換が想定されねばならない。⑧当該期の鏡面は、北部九州地域に最大の分布の中心があることから、天神山古墳の鏡面群には、上で見た『人、物、情報』の流れの一環として、北部九州地域から齎された可能性は否定できない[17]。⑨、奈良県黒塚古墳[18]、ホケノ山古墳など大和の初期の古墳から漢式鏡[19]（5・6期）が出土していない事実は示唆的である。⑩従って、弥生時代後期前半頃までの大和への漢式鏡の流入を完全に否定するものではないが、全てを本来的に大和地域に齎された鏡面とすることはできない。むしろ2期の頃、北部九州地域から畿内（大和）地域に、多くの後漢鏡が齎された可能性が窺われる。⑪従って、2期以降の各地の古墳から出土する後漢鏡には、⑩によって大和に齎された一群からの、さらなる再分配、配布が想定されねばならない。

この基本的立場によって、再び当該期の鏡面分布をみれば、本来的にその地域に齎された分布域としては、北部九州地域を圧倒的な中心地としつつ、瀬戸内沿いに大阪湾岸まで広がる地域とともに、山陰から丹後を経て北陸あるいは、近江、東海と続く、必ずしも出土数は多くはないが、明確に前者とは異なる分布地域を見出すことが可能となる。そして、この後者分布域の中にあって、古保利古墳群の位置する湖北地域は、小松古墳の2面の他に、虎姫丸山古墳の1面を含めて、狭い範囲に分布が集中する傾向が読み取れる。併せて、滋賀県内で見れば、鏡面全体の分布の中心となる湖南地域において、いずれも「再配布鏡」の可能性のある盤竜鏡2面以外、当該期の鏡面が出土していない。当該期の鏡面流入にあたっては、南周りではなく北周りで行われた可能性を示しているのである。すなわち、漢鏡5・6期の鏡面が齎された紀元100年を前後する頃においては、九州から瀬戸内という交易ルートとともに、山陰－丹後地域から、湖北地域を経て、尾張・東海へと広がる交易ルートが存在したようだ。山陰　丹後地域が九州を経て朝鮮半島と結びついていたのか、直接、朝鮮半島との交易を達成していたのかの結論についてはここでは触れないが、弥生中期以降、丹後地域が鉄器の生産と流通の拠点地域としての地位

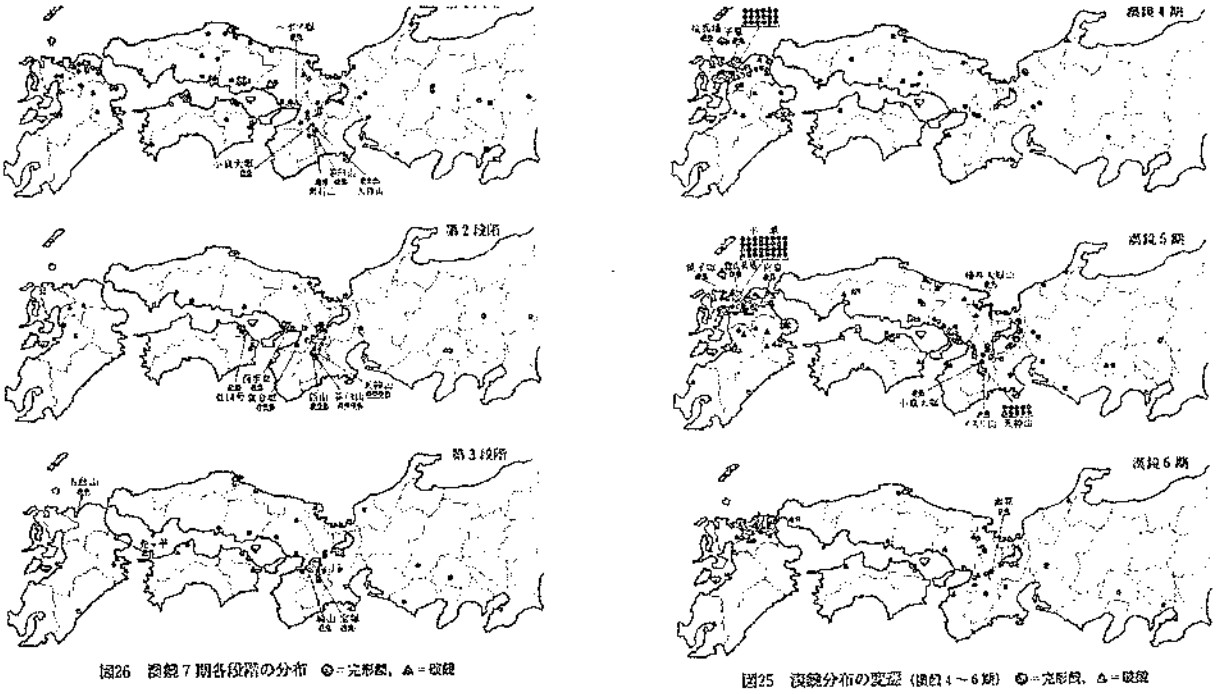

図26　漢鏡7期各段階の分布　◎＝完形鏡、△＝破鏡

図25　漢鏡分布の変遷（漢段4～6期）　◎＝完形鏡、△＝破鏡

図２　岡村秀典『三角縁神獣鏡の時代』吉川弘文館　1999より（一部改変）

を確立するものと考えられており[20]、この求心力の中において、鏡面の流通も執り行われた。丹後地域から三遠式銅鐸が出土している事実や大風呂南墳墓出土の銅釧[21]など、丹後地域と東海（濃尾）地域の密接な関係は明らかである。この関係は、朝鮮半島に一端を発する交通体制の一つであったと理解できるのである。

そして、この両地域を結節する湖北地域では、狭い範囲から合計３面出土すると言う状況を示していることからも、単に地理的な位置関係からのみ両地域を媒介したものではなく、一定の意思を伴った、いわば主体的な結節であった事実を示している。少なくとも、鏡面の分布状況は、湖北地域が交通体制の中で一定の役割を果たしていた事実を示しているのである。

以上、今回の小松古墳から出土した２面鏡面によって、これら鏡面が齎されたと考えられる弥生時代中期後半から後期前半頃、山陰－丹後地域から尾張・東海地域への交易ルートが存在した事実を再確認できた。そして、この交易ルートの中において湖北地域は、主体的な媒介を果たしていたからこそ、一定数の鏡面の蓄積が達成され、宝器として伝世されたのである。おそらくは、同じ琵琶湖地域北部にあたる新旭町熊野本遺跡の鉄器生産などと連携をとった[22]動向と考えられる。

５．後漢末期の鏡面と流入経路の変化

次に、小松古墳が築造された古墳時代前期の状況を探る目的で、漢鏡７期の状況についてみてみたい。

漢鏡７期古段階では、滋賀県下では安土瓢箪山古墳の１例が知られるのみで、京都府北部に集中する傾向が読み取れる。特に、成山２号墳墓や愛宕神社墳墓など、製作後さほど時間を経ず副葬されたと考えられる事例が散見でき、全体としたは少数ではあるが、依然として山陰－丹後地域が当該期の鏡面流入経路となっていた可能性が高い。特に当該期頃から、北部九州地域が鏡面入手の窓口としての地位を喪失しつつある状況は確実であり、相対的に畿内（大和）地域の出土面数が増加傾向を示す中においては、鏡面の出土数以上に山陰－丹後地域の重要性は高く評価されねばならないと感じられる。

しかし、琵琶湖地域を含めた尾張・東海地域の状況をみれば、当該期の鏡面は一定数出土しているが、安土瓢箪山古墳や象鼻山１号墳[23]など、一定期間伝世した後の古墳時代前期中葉以降の副葬例が大半である。こうした鏡面は倭列島に齎された後時間を経ずその地に至ったものと考えるよりも、畿内（大和）地域からの配布威信材など、古墳時代の流通体制の

中で運ばれた可能性が高いと考える。従って、現状の資料から、前段階で見た山陰　丹後地域から尾張・東海地域への交易ルートが機能していたかの即断を下すことは不可能であり、むしろ、続く漢鏡７期新段階の状況の前兆的として見ておくべきかも知れない。

漢鏡７期新段階はさらに２分して考える必要がある。新段階の第１群は画文帯神獣鏡の段階である。画文帯神獣鏡は、北近畿では丹後から１面出土しているのみであり、この頃から当該地域がその地位を低下させていった表出とも理解されている。[24] ところで、画文帯神獣鏡は、畿内（大和）地域に分布の中心を持ち、九州地域からは破鏡を含めて４例が出土するのみである。その分布傾向から畿内（大和）地域に直接齎された鏡面であり、そこから、山城南部や瀬戸内東部など近隣地域を中心に配布されたものと理解されている。[25] この場合、大和・畿内地域は、北部九州地域を媒介とせずに、直接朝鮮半島の楽浪・帯方郡や公孫氏勢力と結びついた結果、この鏡面を入手した可能性が高いものとなる。この理解に立脚した場合、山陰－丹後地域の存在を重視せざるを得ないのである。

確かに山陰－丹後地域からの出土数は少ないもの、太田南２号墳と言う中規模以下の古墳から画文帯神獣鏡が出土し、さらにこれ以降、青龍３年銘鏡、景初４年銘鏡、正始元年銘鏡と、日本列島では出土例の少ない紀年銘鏡が連続的に、かついずれも中小古墳から出土する。この紀年銘鏡の出土状況を重視するならば、畿内（大和）地域の青海（日本海）航海から大陸交渉に関して、山陰－丹後地域が重要な役割を果たしたであろう点は疑いのないところとなってくる。さらに、当該期の直後ころから開始されるであろう「前方後円墳秩序」の形成に向けて、丹後地域の舟形木棺と豊富な副葬品を有した大型墳丘墓が、前方後円墳創出の一翼を担った可能性を考えれば、[26] 山陰―丹後地域の出土鏡面を、その数量のみで評価する方法は誤りであると考える。紀年銘鏡の入手に相応しい、文字通り「記念すべき」対外交渉において活躍した結果と考えたい。

新段階の第２群については、大半が前期後半の古墳から出土することから、より新しい段階に齎された鏡面である可能性も考えられている。[27] しかし、その分布状態を見れば画文帯神獣鏡と相似すると認識でき、伝世をどう考えるかの問題もあるが、入手経路については第１群（画文帯神獣鏡）と大きく区別する必要はないとも考えられる。流入についても必ずしも新しくする必要もなさそうである。[28] すなわち、画文帯神獣鏡と同様の段階に、同様の方法において、畿内（大和）地域が入手した可能性が強いものであり、当然、この流入についても山陰－丹後地域の存在を無視することはできないのである。

ところで、この漢鏡７期新段階の鏡面は、尾張・東海地域においては極めて限定的な存在に過ぎない点は注意を必要とする。岐阜県円満寺山古墳から画文帯神獣鏡が出土しているのみであり、[29] 続く古相の三角縁神獣鏡についても、伊勢湾沿岸地域、中でも尾張地域においてはほとんど出土していない事実が存在する。[30] これに歩調を併せるかのように、琵琶湖地域北部でも当該期の鏡面は出土しておらず、ここに至って、山陰－丹後地域と尾張・東海地域とを結節していた交易ルートが分断されている可能性が高くなってくる。先に見た丹後大風呂南１号墳の造営直後の出来事である。

この分断現象は、畿内（大和）地域が北部九州地域を介することなく直接鏡面を入手する事実と直結する。すなわち、山陰－丹後地域がこれまでの尾張・東海地域との交通関係を断ち切り、畿内（大和）地域との交通関係を強化した事実によって、初めて畿内（大和）地域における鏡面入手の優位性が確立できたのである。これまでの個別的に存在した交易ルートの大規模な再編成を行い、基本的に畿内（大和）地域を経由する、再分配の方法へ変化させたのである。ただし、この現象を単純に勢力争いや騒乱などと結びつけて考える方法には賛意を表しない。「前方後円墳」創出は、一種の流通革命を目的とした現象であると考えており、[31] この山陰－丹後地域の方向転換こそ流通革命の第１歩に他ならないと考えるからである。畿内（大和）地域に流通の核を集中させ、そこからの再分配構造を構築する。中国大陸の動乱や再統一の中で、これを背景とした北部九州地域の相対的な停滞の中で、倭列島の多くの地域が選択した、政治的な結果なのである。当然、尾張・東海地

北近畿出土の漢式鏡～初期仿製鏡

番号	鏡名	径	製作年代		出土遺跡	墳形	規模	所在地	備考
1	連弧文銘帯鏡	9.6	漢鏡4		花野谷1	円	18	福井県福井市	
2	方格規矩鏡	12.9	漢鏡4		森尾古墳	方	35	兵庫県豊岡市	模糊・第1石室
3	内行花文鏡	15.1	漢鏡5		経子山1号	方円	145	京都府加悦町	模糊
4	四乳座内行花文鏡	21.0	漢鏡5		小松	方方	59.7	滋賀県高月町	破砕・模糊
5	内行花文鏡(片)	17.0	漢鏡5		寺ノ段2号	方	15	京都府福知山市	模糊
6	内行花文鏡	10.2	漢鏡5		斗西遺跡			滋賀県能登川町	破片
7	唐草文縁半肉彫獣帯鏡	13.6	漢鏡5		虎姫北山	方円	60	滋賀県虎姫町	
8	唐草文縁細線式獣帯鏡	11.5	漢鏡5		虎姫丸山	円		滋賀県虎姫町	破砕・模糊
9	内行花文鏡(片)		漢鏡5		中ノ郷深谷1号	方	21	兵庫県豊岡市	模糊・第2主体
10	盤竜鏡	13.0	漢鏡5		和泉大塚山	方円	72	滋賀県志賀町	
11	内行花文鏡	7.5	漢鏡6		愛宕山3号	円	27	京都府加悦町	模糊
12	盤竜鏡	11.1	漢鏡6		岡山	円		滋賀県栗東市	
13	方格規矩鏡	14.0	漢鏡6		小松	方方	59.7	滋賀県高月町	破砕・模糊
14	盤竜鏡	14.3	漢鏡6		園部垣内	方円	82	京都府園部町	
15	双頭龍文鏡	12.3	漢鏡6		園部黒田	方円	52	京都府園部町	破砕
16	平縁四乳鏡	9.4	漢鏡6		狸谷17号	方	13	京都府福知山市	模糊
17	方格規矩鏡(片)	17.0	漢鏡6		寺ノ段2号	方	15	京都府福知山市	模糊
18	盤竜鏡	11.5	漢鏡6		ヌクモ2号	方	8	京都府福知山市	
19	キ鳳鏡	15.0	漢鏡7	古	安土瓢箪山	方円	134	滋賀県安土町	
20	斜縁獣帯鏡(片)	11.0	漢鏡7	古	狸谷17号	方	13	京都府福知山市	
21	斜縁獣帯鏡(片)	14.2	漢鏡7	古	千歳下	土坑		京都府舞鶴市	穿孔
22	斜縁四獣鏡	12.8	漢鏡7	古	愛宕神社	方	20	京都府弥栄町	破砕
23	神人車馬画像鏡	21.4	漢鏡7	古	岩滝丸山	円	30	京都府岩滝町	
24	飛禽鏡	9.1	漢鏡7	古	岩内山遺跡			福井県武生市	
25	飛禽鏡	9.5	漢鏡7	古	成山2号	方	18	京都府福知山市	
26	方格四獣鏡	12.3	漢鏡7	古	入佐山3号	方	36	兵庫県出石町	
27	画文帯環状乳神獣鏡	14.5	漢鏡7	新	大田南2号	方	20	京都府弥栄町・峰山町	
28	斜縁吾作銘二神二獣鏡	14.2	漢鏡7	新	安養寺大塚越	方円	75	滋賀県栗東市	
29	斜縁吾作銘二神二獣鏡	18.1	漢鏡7	新	山ノ上	円		滋賀県栗東市	
30	斜縁四獣鏡	14.8	漢鏡7	新	城の山	円	36	兵庫県和田山町	
31	斜縁四獣鏡	13.0	漢鏡7	新	丸山1	方円	48	兵庫県山南町	南石室
32	二神二獣鏡	10.1	漢鏡7	新	能ヶ岡	円	30	福井県足羽町	
33	青龍三年方格規矩四神鏡	17.4	三国	1	大田南5号	方	18	京都府弥栄町・峰山町	
34	景初四年盤竜鏡	17.0	三国	1	広峯15号	方円	42	京都府福知山市	三角古
35	三角縁王氏作陵州銘四神四獣鏡	21.9	三国	1	古富波山	円	20	滋賀県野洲町	
36	三角縁陳氏作銘四神二獣鏡	21.8	三国	1	古富波山	円	20	滋賀県野洲町	
37	正始元年三角縁神獣鏡	22.6	三国	1	森尾	方	35	兵庫県豊岡市	三角古・第3石室
38	三角縁画文帯盤竜鏡	24.5	三国	2	大岩山2番山林	円		滋賀県野洲町	
39	三角縁唐草文帯四神四獣鏡	23.5	三国	2	雪野山	方円	70	滋賀県八日市市	
40	三角縁吾作銘三神五獣鏡	22.0	三国	2	古富波山	円	20	滋賀県野洲町	
41	三角縁三神二獣一虫鏡	22.2	三国	2	加悦丸山	円	65	京都府加悦町	
42	三角縁新出銘四神四獣鏡	24.0	三国	2	雪野山	方円	70	滋賀県八日市市	
43	三角縁天王日月四神四獣鏡	22	三国	2	花野谷1	円	18	福井県福井市	
44	三角縁波文帯盤竜鏡	24.0	三国	2	雪野山	方円	70	滋賀県八日市市	
45	三角縁四神四獣鏡	25.4	三国	2	森尾	方	35	兵庫県豊岡市	三角古・第2石室
46	三角縁四神四獣鏡	23.1	三国	2	織部	円	30	滋賀県大津市	三角古
47	三角縁四神三獣博山炉鏡	20.0	三国	2	園部垣内	方円	82	京都府園部町	
48	三角縁二神三獣車馬鏡	25.7	三国	3	大岩山2番山林	円		滋賀県野洲町	
49	天王日月獣文帯二神四獣鏡	21.3	三国	3	大岩山2番山林	円		滋賀県野洲町	
50	三角縁天王日月獣文帯三神三獣鏡	22.1	三国	3	岡山	円		滋賀県栗東市	
51	三角縁三仏三獣鏡	20.5	三国	4	園部垣内	方円	82	京都府園部町	
52	三角縁獣文帯三神三獣鏡	21.5	三国	4	親王塚	円	30	兵庫県氷上町	
53	三角縁獣文帯三神三獣鏡	21.6	三国	4	城の山	円	36	兵庫県和田山町	
54	三角縁獣文帯三神三獣鏡	24.1	三国	4	城の山	円	36	兵庫県和田山町	
55	三角縁波文帯三神三獣鏡	21.2	三国	4	城の山	円	36	兵庫県和田山町	
56	三角縁波文帯三神三獣鏡	21.3	三国	4	小見塚	円	?	兵庫県城崎町	
57	獣帯鏡	23.0	三国		大岩山2番山林	円		滋賀県野洲町	
58	唐草文鏡	15.4	三国		城の山	円	36	兵庫県和田山町	
59	方格規矩鳥文鏡	15.4	三国		城の山	円	36	兵庫県和田山町	
60	方格規矩鳥文鏡	15.6	三国		馬場19号			兵庫県山東町	
61	三角縁神獣鏡	22.4	三国		足羽山頂付近	円	60	福井県福井市	
62	三角縁神獣鏡		三国		足羽山頂付近	円	60	福井県福井市	

63	三角縁三神三獣鏡	21.7	ホウセイ	出庭亀塚	方円	60	滋賀県栗東市	
64	三角縁三神三獣鏡	21.8	ホウセイ	大岩山	円		滋賀県野洲町	天王山古墳
65	三角縁獣帯三神三獣鏡	24.0	ホウセイ	園部垣内	方円	82	京都府園部町	
66	方格規矩神獣文鏡	28.8	ホウセイ	加悦丸山	円	65	京都府加悦町	
67	擬銘帯画像鏡	26.5	ホウセイ	大岩山	円		滋賀県野洲町	天王山古墳
68	夕竜鏡	26.5	ホウセイ	雪野山	方円	70	滋賀県八日市市	
69	内行花文鏡	24.0	ホウセイ	雪野山	方円	70	滋賀県八日市市	
70	方格規矩鏡	23.8	ホウセイ	北谷11	円	45	滋賀県草津市	
71	擬銘帯画像獣帯鏡	21.0	ホウセイ	園部垣内	方円	82	京都府園部町	
72	半円方形帯四獣形鏡	20.0	ホウセイ	園部垣内	方円	82	京都府園部町	
73	細線式獣形鏡	18.8	ホウセイ	小見塚	円		兵庫県城崎町	
74	獸鏡	14.0	ホウセイ	大岩山2番山林	円		滋賀県野洲町	破片・不明
75	方格渦文鏡	13.5	ホウセイ	カジヤ古墳	円	73	京都府峰山町	
76	二神二獣鏡	13.4	ホウセイ	安土瓢箪山	方円	134	滋賀県安土町	
77	乳文鏡	12.1	ホウセイ	長泉寺山9	円	17	福井県鯖江市	
78	四獣形鏡	12.0	ホウセイ	小山谷	石棺		福井県福井市	他に不明鏡5面
79	四獣形鏡	12.0	ホウセイ	下安良城山2	円	20	兵庫県出石町	
80	内行花文鏡	11.7	ホウセイ	筒江中山23	円	27	兵庫県和田山町	
81	家屋人物獣文鏡	11.4	ホウセイ	松明山2	方	17	福井県今立町	
82	捩文鏡	10.8	ホウセイ	小羽山12	方円	45	福井県清水町	
83	内行花文鏡	10.4	ホウセイ	作り山1	方円	45	京都府加悦町	前方部
84	四獣形鏡	10.0	ホウセイ	日ノ内	円		京都府岩滝町	
85	四獣形鏡	9.9	ホウセイ	御座敷遺跡2			兵庫県出石町	
86	四獣形鏡	9.7	ホウセイ	御座敷遺跡1			兵庫県出石町	
87	乳文鏡	9.6	ホウセイ	北浦18	円	20	兵庫県豊岡市	
88	四獣形鏡	9.6	ホウセイ	作り山1	方円	45	京都府加悦町	後円部
89	内行花文鏡	9.5	ホウセイ	中ノ郷深谷1号	方	21	兵庫県豊岡市	第4主体
90	素文鏡	9.3	ホウセイ	安養寺大塚越	方円	75	滋賀県栗東市	
91	内行花文鏡	9.3	ホウセイ	下味	円	35	滋賀県栗東市	東主体
92	変形文鏡	9.0	ホウセイ	毛刈	円	10	滋賀県栗東市	
93	内行花文鏡	8.5	ホウセイ	谷尾谷1	円	14	京都府福知山市	
94	四獣形鏡	8.5	ホウセイ	入佐山3	方	36	兵庫県出石町	
95	四獣形鏡	8.4	ホウセイ	狐山	方円	31.3	福井県鯖江市	
96	珠文鏡	7.3	ホウセイ	田多地5	方	30	兵庫県出石町	
97	乳文鏡	6.8	ホウセイ	小谷ヶ洞2	円	25	福井県敦賀市	
98	内行花文鏡	6.7	ホウセイ	田多地3	方	30	兵庫県出石町	
99	櫛歯文鏡	6.6	ホウセイ	下味	円	35	滋賀県栗東市	西主体
100	内行花文鏡	6.5	ホウセイ	丸山1	方円	48	兵庫県山南町	北石室
101	捩文鏡	6.5	ホウセイ	龍ヶ岡	円	30	福井県足羽町	
102	素文鏡	4.2	ホウセイ	立洞2	方円	25	福井県敦賀市	

国立歴史民俗博物館研究報告第56集　共同研究「日本出土鏡データ集成」2および
福永信哉「中国鏡流入のメカニズムと北近畿の時代転換点」『丹後の弥生王墓と巨大古墳』雄山閣 2000 を基本として作成
制作年代は、岡村秀則『三角縁神獣鏡の時代』吉川弘文館 1999を参考とした。

域も、この体制を確立することによって、畿内（大和）地域を経由したより安定した交通体制を志向したと考えるべきであり、事実、古墳時代開始期から、古墳時代を通じて尾張・東海地域へも、多くの「人・物・情報」が齎されている。こうした流通体制の再編成こそが、前方後円墳創出と表裏を成す大きな一歩であり、当該期の意味するところは小さくないのである。

6．三角縁神獣鏡と前方後円墳の創出

こうした動向がさらに小地域ごとの個性として貫徹されるのが、三角縁神獣鏡を代表とする三国時代の鏡面である。まず、北近畿の幾つかの小地域をやや詳しく見てみたい。

丹後地域では上で述べたように当概期の紀年銘鏡が連続的に中小古墳から出土する以外、古相の三角縁神獣鏡は、加悦丸山古墳、森尾古墳、園部垣内古墳から出土しているのみであり、新相の三角縁神獣鏡に関しても、城の山古墳、小見塚古墳、新王塚古墳、園部垣内古墳から出土するにすぎない。数量的には少なくはないが、所謂「丹後中枢部」からの出土例は加悦丸山古墳が唯一の事例であり、他はむしろ丹後周辺部に含まれる。こうした状況に対応するかのように、丹後地域では墳墓造営そのものの停滞現象を示す。先述の画文帯神獣鏡の他、青龍三年銘鏡をも出土した太田南古墳群は、いずれもせいぜい30 m以下級の古墳であり、内容的には弥生時代後期に著しく発達した墳丘墓の系譜を引き継ぐものの、その最高峰に位置する大風呂南１号墓や赤坂今井墳丘墓[32]に比べて、貧弱と言わざるを得ない内容である。正始元年銘鏡のほか今１面の三角縁神獣鏡を出土した森尾古墳も同様である。大型前方後円墳が造営される３期まで、あるいはその魁となる加悦丸山古墳やカジヤ古墳などの大型円墳が造営される２期後半まで、こうした小規模の方・円墳が丹後地域の墓制における基本形態である[33]。さらに、大型円墳２例がいずれも仿製鏡（倭鏡）を伴っている事実からすれば、伝統的な鏡面を保有しない『新興の首長層』を被葬者に想定することも不可能ではなく[34]、この段階の丹後地域には、墓制に反映され得る、大型の墳墓を造営する首長層すら存在しなかった可能性も窺えるのである。多くの紀年銘鏡が存在する事実との格差は大きいとしておきたい。

琵琶湖地域北部からも現時点では三角縁神獣鏡は出土しておらず、丹後地域から連続する動向とも見てとれる。しかし、琵琶湖地域北部においては、小松古墳の位置する古保利古墳群では、70 m級の前方後円墳がほぼ連続的に造営されている可能性が高く、さらに、40 m級の前方後円墳が重層的に営まれている。この造墓構造の問題もあるが、少なくとも丹後地域とは異なり、一定以上の首長墓を造営し得る首長層の存在は疑いの無いところである。従って、今後の調査によっては三角縁神獣鏡が出土する可能性は高いと考えられる。

北近畿において三角縁神獣鏡、中でも古相の鏡群が最も多く出土するのが琵琶湖地域南部である。前段階まではほとんど鏡面を入手することの無かった地域が、一転、相当数の三角縁神獣鏡が集中的に配布されたのであり、丹後地域とは相反する動向とも考えられる。新相の三角縁神獣鏡が少ないと言う指摘も存在するが[35]、古式の三角縁神獣鏡以外でも、漢鏡７期新段階第２群の鏡面や三角縁神獣鏡を含めた初期の仿製鏡なども比較的まとまって出土する状況が見てとれ、古墳時代前期を通じて鏡面を有利に入手する傾向は継続すると考える。

特に野洲川下流域でこの傾向は顕著であり、しかも、現在まで三角縁神獣鏡が出土した古墳は円墳もしくは方墳で、確実な前方後円墳が１基も存在しないという特性を示している[36]。この円墳・方墳が在地的な弥生墳丘墓の系譜に位置する存在であるのか、あるいは「前方後円墳秩序」の中に位置付けられた円・方墳であるかの結論は出せないが、まとまった数量の三角縁神獣鏡を出土する地域において、こうした出土傾向を示すものは皆無であり、その意味するところはともかく、際立った地域の特徴として注視する必要は高い。

この地域についてさらに見ておけば、伊勢遺跡や下鈎遺跡・下長遺跡など、弥生時代後期以降、極めて特徴で先進的な社会展開を示す可能性が考えられる地域であり[37]、大岩山出土の銅鐸など、地域社会の中で象徴的な立場を形成していたも考えられる。古墳時代に至っても高野・辻遺跡群を中心に大規模な

集落を形成し、しかも手工業生産と流通を通じて発展する状況が知られている。[38] その内容からすれば、一定規模以上の前方後円墳が営まれても何ら不思議の無い地域である。さらに、中期以降においても首長系譜は帆立貝形古墳で連続し、後期を含めて一貫して前方後円墳を造営しない地域としても認識できる。[39] こうした状況を加味すれば、野洲川下流地域は、前方後円墳創出の中で畿内（大和）地域に大きな影響を与え、「倭王権」と特殊な関係を形成した可能性がありそうだ。従って、円墳・方墳から三角縁神獣鏡が出土する現象は、逆に前方後円墳を造営しないと言う「負の側面」を強調し、丹後地域などと同様に「停滞」的状況に通じるものと考える方が適切であろう。

同様に今まで鏡の入手とは縁が薄かった湖東地域の雪野山古墳[40]も、この段階に古相の三角縁神獣鏡を中心に鏡面の配布を受けるが、ここでは前方後円墳を採用している。従って、古式の三角縁神獣鏡の配布と言う点で湖南地域と同列に扱うことは誤りと考える。

さらに、湖西南部地域では、現在までは和邇大塚山古墳から漢鏡５期の盤竜鏡が出土しているのみであるが、一定数の前方後円墳が連続的に造営され、[41] 明らかに野洲川下流域とは相異する。しかも、霊笠山古墳に都月型埴輪が採用され、吉備地域との密接な関係を締結していた。この墳形については円墳とする見方が一般的であるが、最近の研究では前方後円墳とする考え方も示されており、[42] 前方後円墳創出期において湖西南部地域が重視されていた事実を示している。従って、今後の調査によって、この地域の中から三角縁神獣鏡が出土する可能性が強く、湖南地域とは区別してあつかうべきであろう。

このように、三国時代の鏡面は地域ごとの個性を強く発揮しつつ分布している事実が確認できる。こうした小地域ごとの個性の原因は、言うまでもなく、「倭王権」形成に際して、それぞれの小地域の首長層がどのように関与したかの差異であり、同時に、それぞれの小地域がどのように形成されたかの過程の差異である。こうした差異が顕在化する背景には、前段階から動き出した交通体制の再編成が完成し、新しい体制（＝再分配構造）によって、地域ごとの個性に合わせた流通が機能している事実を読み取れる。ここに、前方後円墳の創出の目的となった流通革命は完成したのである。

なお、それぞれの差異については、これ以上立ち入らないが、丹後地域などのように、一見停滞したかの状況に関して、現象面のみでは理解できない点を指摘しておきたい。

すなわち、すでに確認したとおり、丹後地域が鏡面入手に果たした役割は決して小さくはないと考えられる事実に併せ、備中地域、出雲地域、播磨地域、尾張地域など、[43]「前方後円墳秩序」の形成直前に隆盛を誇り、かつ、前方後円墳の祖形と考えられる諸要素を提供したと考えられる地域が、こぞって、前期全前半には「それぞれなりに」停滞したかのような状況を示している。この共鳴的停滞現象については通常では理解し難く、「前方後円墳秩序」の形成に際しては、かなり広い範囲での首長墓の統一と結集が行われた可能性を考える必要がある。[44] これらの地域については「没落・衰退」したのではなく、「前方後円墳秩序」の具体的担い手（＝大和王権）の一員として、他所に墓域を求めた可能性を考える必要がありそうだ。吉備地域ではその中枢部備中を取り囲むように中規模の前方後円墳が造営される。丹後地域は古墳時代初期の最高首長墓は造営しない。湖南地域では円墳系列に三角縁神獣鏡を副葬する。尾張地域では、初期の三角縁神獣鏡を入手しない。いずれも停滞したと考えるよりも、それぞれの地域の最高首長層が他に墓域を求めた結果とすれば、その共鳴現象は比較的容易に説明し得るのである。これは、今後大和中枢部の古墳の研究が進化することによって、例えば大和における宮山型特殊器台のように、より具体化した解決の糸口が見つけられるのであろう。

以上、鏡面という一種類の宝器からのみであるが、「前方後円墳」創出の直前頃には、おそらく列島規模で広がるであろう、交通体制の再編成の動向が見て取れた。この交通体制の再編成によって、初めて畿内（大和）地域は、独占的に鏡面を入手することが可能になり、これを「前方後円墳秩序」の中で、配布（再分配）していったのである。この交通体制の再編成は、当然前段階の交通体制の中心にあった、

吉備、出雲、東部瀬戸内、丹後、尾張などの地域の首長層が主導的に行い、新しく生み出した交通体制を確認し、維持するために生み出されたのが「前方後円墳」であった。従って、これら主導した地域の首長層は、より強大な権力を入手し、結束してその権力の維持を図ったのである。初期の倭王権の実態は、そうしたものであった可能性が高い。いずれにしろ、こうした交通体制の再編成はその中心主体となった地域以外にも大きな変化を齎した点は確実である。丹後地域と尾張地域を結びつけていた湖北地域も、そうした周辺地域の一つである。しかし、前段階までに果たした役割の大きさの故か、そうした周辺地域として一括するには、あまりも特殊な状況が見て取れる。最後にこうした視点から再び小松古墳を見直してみたい。

7．古保利古墳群に戻って

小松古墳は、前方後円墳成立以降の築造となる前方後方墳で、そこに副葬されていた鏡面は、山陰－丹後地域から尾張・東海地域へと連接する交易ルートの仲介者としての立場から、湖北地域が弥生時代後期の早い段階に入手したものと考えた。

その後、小松古墳の造営される直前、漢鏡７期新段階以降、畿内（大和）地域が直接的な鏡面入手を志向する中で、丹後地域－畿内地域の関係が強化され、山陰－丹後地域と尾張・東海地域との関係が分断された。[45] これに伴い、琵琶湖の持つ志向性が、若狭から湖北・美濃・尾張と連続するルートの言うなれば北東志向の段階から、湖西・湖南・山城と連続する南西志向の段階へ変化した点は、その後に流通する鏡面の分布状況からも明らかである。

同時に、この変化は、畿内（大和）地域を中核とする新たな交通体制（再分配構造）の形成をも意味している。小論では、鏡と言う威信材の一つのみを扱ったが、「人・物・情報」の多岐に渡る流通革命であった。この新たな交通体制の中においても琵琶湖地域は大きな役割を果たすこととなる。畿内（大和）地域と東海地域･北陸地域を結びつける要所（差配の地）としての性格故である。野洲川下流地域における高野・辻遺跡群は、まさにこの「人・物・情報」の生産・流通拠点として発達した。また、小松古墳の位置する湖北地域は、北陸地域へ向かう門戸であり、東海地域へ向かう場合も、影響の強い範囲内に存在する。小松古墳が、この性格を背景として造営された事実は疑いがない。

小松古墳の被葬者は、山陰－丹後地域と尾張・東海地域と仲介者として入手した鏡面（漢鏡５･６期）を副葬することによってこの交通関係を断ち切り、前方後方墳と言う墳丘ともに、銅鏃を始めとする副葬品の意義や、体底部穿孔壺による儀礼化した供食のイデオロギーを採用することによって、畿内（大和）地域から北陸・東海地域との結節点としての性格を手に入れたのである。まさに、小松古墳は地域･時代・体制の変換点に造営されたのであった。

ところで、小松古墳の含まれる古保利古墳群は、複数の首長系譜を含む古墳群である事実を最大の特徴としている。分析者によって異なるが、周辺地域を含めれば、前期段階において３から４以上の首長系譜（前方後円（方）墳系列）が指摘でき、さらに、同時代の円墳や方墳の系譜も存在する。しかも、首長墓系譜には小松古墳などの前方後方墳とともに、西野山古墳などの前方後円墳も存在する。こうした複数系列による複雑な構成を占めす古墳群は、所謂「大王墓古墳群」を除けば極めて異例な存在であり、[46] かつて筆者は、古保利古墳群に関しては琵琶湖地域北部のかなり広い範囲から首長層が結集した結果と考えた。[47]

しかし、上で見たような地域の性格の変遷、特に山陰－丹後地域と尾張・東海地域と言う古墳創出期から古墳時代全般を通じて重視される地域に挟まれた、かつてはその両者を結節した主体としての性格を考えた時、さらに、古墳副葬品として重要な位置を占める玉類特に碧玉製腕飾類の製作・流通を考えた時、畿内（大和）地域にとって、湖北地域は無視できない存在であったはずである。逆に、畿内以東諸地域の首長層にとっても、湖北地域は畿内（大和）地域へ影響を維持する上で無視できない存在でもあった。こうした状況からすれば、古保利古墳群への首長層の結集は、琵琶湖地域北部のみに限定するべきではないとの考えが浮かび上がる。

大和地域に造営される大王墓古墳群、これ自体が畿内（大和）地域を越えた、相当に広い地域からの

首長層の結集による可能性は既に検討したとおりである。これと同様の理論が古保利古墳群の造営に関しても貫かれていたとしても何ら不思議はない。前期古墳（必ずしも前期に限らないが）は、現在から想像する以上に、広範囲にわたる「人・物・情報」の移動の結果として造営された。言い換えれば、前方後円墳の存在する場所こそ重要であるが、その前方後円墳の被葬者は必ずしもその場所の首長層とは断言できない可能性をもつのである。古保利古墳群のように、明らかに複数の首長層が結集して墓域を形成している場合は、全ての首長系譜を近隣で復元することこそ、不自然ではなかろうか。

吉備・出雲・丹後・瀬戸内東部の諸地域が主導となった前方後円墳創出への動にとっては、北部九州の対応とともに、近畿以東の地域の方向性が大きな課題であったはずだ。結果として近畿以東の地もその動向に巻き込まれ、参加していったと考えるが、近畿以東のシンボルとである前方後方墳が、[48]当初段階からその秩序の独立した一要素である一方、決して前方後円墳を越える存在には成り得なかった。そこに、近畿以東、具体的には尾張・東海地域の微妙な立場が読み取れる。強力な個性と影響力をもつ存在であった点は確かである。それ故に、初期の倭王権にとって、近畿以東の諸勢力との関係維持が重要なテーマの一つであった点は[49]確実なのである。

ここに、当概期の琵琶湖地域の特にその北部地域の重要性が潜んでいる。畿内地域、東海地域、北陸地域の利害が競合する地であり、在地の首長層も決して貧弱な存在ではなかった。畿内以東における「前方後円墳秩序」の維持の命運を担っている地域と言っても過言ではないだろう。ここに、大王墓古墳群以外では異例の存在である「複数首長系譜型古墳群」である古保利古墳群が造営される。具体的な「人・物・情報」の動向は跡付けられないが、少なくとも、その造営に対して、畿内地域、東海地域、北陸地域などからの多くの干渉が存在した点は容易に想像できる。この古墳群の造営は利害の競合そのものであり、この干渉は競合する利害調整の結果である。こうした状況こそが、階層性を伴った複数首長系譜の成立と見なさなければならないだろう。現時点ではこの具体像は一切解明できていない。今後の古保利古墳群研究の最大の課題なのである。

註

(1) 黒坂秀樹『古保利古墳群第1次確認調査穂報告書』高月町教育員会　2001

(2) この形式の銅鏃については、奈良県ホケノ山古墳から40本以上まとまって出土したことから、「前方後円墳」以前にまで遡る可能性が考慮されている。しかし、ホケノ山古墳の年代が果たして「前方後円墳」以前にまで遡りうるのか確定したものではなく、ホケノ山古墳例もって、この種の銅鏃を古く考えることは誤りである。ただし、権現山51号墳から腸抉柳葉式銅鏃が、弘法山古墳からも柳葉式銅鏃と篦被付葉式鉄鏃が出土しているなどの事実からすれば、所謂「柳葉式銅鏃」が、従来言われてきたよりも古い段階から出土する可能性については否定しない。

(3) 金井亀喜ほか『松ヶ迫遺跡群発掘調査報告書』広島県教育委員会　1981

(4) 近藤義郎『前方後円墳と吉備・大和』吉備人出版　2001

(5) 渡部明夫ほか『鶴尾神社4号墳調査報告書』高松市教育委員会　1983

(6) 樋口隆康ほか『ホケノ山古墳調査概報』奈良県立橿原考古学研究所・学生社　2001

(7) 末永雅雄ほか『桜井茶臼山古墳　附櫛山古墳』奈良県教育委員会　1961

(8) 箸中山古墳の築造年代については、土器研究の立場から「布留0式」期と提示されている。従って、理論的にはこの「布留0期」期が「宮山型」期と同時期である訳であるが、必ずしも確定的ではなさそうである。筆者は「宮山型」期は「布留0式」期を含めて、やや遡る「庄内3式」の一部を含む頃と理解している。

(9) 前掲4)　近藤義郎

(10) 松木武彦「前期古墳副葬鏃群の成立過程と構成」『雪野山古墳の研究』八日市市教育委員会 1996

(11) 岡村秀典「後漢鏡の編年」『国立歴史民俗資料館研究報告』第55集　1993
以下、漢鏡の編年については同じ。

(12) 伊達宗泰ほか『大和天神山古墳』奈良県教育委員会　1963

(13) 岡村秀典『三角縁神獣鏡の時代』吉川弘文館 1999

(14) 立木修「後漢の鏡と三世紀の鏡」『日本と世界の考古学』1994

(15) 赤塚次郎「瑞龍寺山山頂墳と山中様式」『弥生文化博物館研究報告』第1集　1992

(16) 林正憲「古墳時代前期における倭鏡の製作」『考古学雑誌』85-4　2001

(17) モデルとなる鏡面とともに、仿製鏡（倭鏡）の製作技術

についても北部九州地域から齎された可能性を考えるべきである。大和で製作された可能性が高い仿製三角縁神獣鏡とは全く異なる技術系譜である一方、平原墳丘墓の大型仿製鏡はむしろ技術系譜的に近いものと考える。古墳時代の性格を考え貴重な事例の一つであろう。

(18) 樋口隆康ほか『黒塚古墳調査概報』奈良県立橿原考古学研究所・学生社 1999

(19) その他大和地域の初期の前方後円墳の事例とされる中山大塚古墳では獣帯鏡が出土している。大和以外では、椿井大塚山古墳からは、内行花文鏡、方格規矩鏡、画文帯神獣鏡、 西求女塚古墳からは、半肉彫獣帯鏡、上方作系獣帯鏡、画像鏡、画文帯環状乳神獣鏡２が出土している。その他では矢藤治山古墳では飛禽文鏡、宮山古墳では方格規矩鏡が出土する。それ以前の墳墓では、荻原１号墳の画文帯環状乳神獣鏡、西条５２号墳の内行為化文鏡などが出土する。三角縁神獣鏡や画文帯神獣鏡など以外の後漢鏡は、大和以外では決して少なくはない。後漢鏡が、弥生時代中に近畿以東まで確実に流通していた証であるが、同時に、東部瀬戸内以東における鏡面副葬の習俗が、荻原１号墳や西条52号墳、さらに園部黒田１号墳を初現とする(庄内式前半)ことから、前方後円墳創出への動きの中で、倭列島内を後漢鏡が大きく移動した可能性も考えられなくもない。

(20) 例えば、野島永「弥生時代の対外交易と流通」『丹後の弥生王墓と巨大古墳』雄山閣 2000
村上恭通『倭人と鉄の考古学』青木書店 1998 など

(21) 白数真也ほか『大風呂南墳墓群』岩滝町教育委員会 2000

(22) 横井川博之「湖西地域における弥生集落の様相」『みずほ』33 2000

(23) 宇野隆夫ほか『象鼻山１号古墳』養老町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室 1998

(24) 福永信哉「中国鏡流入のメカニズムと北近畿の時代転換点」『丹後の弥生王墓と巨大古墳』雄山閣 2000

(25) 前掲 13) 岡村秀典

(26) 前掲 4) 近藤義郎

(27) 前掲 13) 岡村秀典

(28) 小山田宏一「3 世紀の鏡」『倭人と鏡』第 36 回埋蔵文化財研究集会資料 1994

(29) 中井正幸「東海の前期古墳の鏡」『倭人と鏡』第 36 回埋蔵文化財研究集会資料 1994

(30) 福永信哉「雪野山古墳と近江の前期古墳」『雪野山古墳の研究』八日市市教育委員会 1996

(31) 古墳副葬品、すなわち威信材と言う形態を典型的な方法として、生産・入手・流通・集中・再分配・副葬（祭祀）の構造を畿内（大和）地域が直接的・間接的に関与する体制を形成したのが古墳時代である。その対象となる威信材の品目・内容・祭祀方法によって、その体制は変化するが、結果、全体として「人・物・情報」の支配を貫徹させる方向へと向かうのである。細川修平「古墳時代における琵琶湖およびその周辺地域」『紀要』第 11 号 財団法人滋賀県文化財保護協会 1998

(32) 石崎善久ほか「赤坂今井墳丘墓・今井城跡・今井古墳発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』92 2000

(33) 広瀬和雄「丹後の巨大古墳」『丹後の弥生王墓と巨大古墳』雄山閣 2000

(34) 倭鏡、特に初期倭鏡の配布は、漢鏡を持ち得なかった地方の首長層に限定的に行われた可能性を考えている。三角縁神獣鏡中心の中にあって、漢鏡が特殊な副葬状態、重要視された状態の事例は多い。初期倭鏡は、明らかにこの漢鏡の不足を補う目的で製作されたものであり、漢鏡に準じつつも明らかに区別された、しかも、三角縁神獣鏡とも区別される鏡面である。これを配布された首長層は、そうした鏡面の性格を反映している可能性が高いと考える。別に論じたい課題である。

(35) 前掲 30) 福永信哉

(36) 仿製三角縁神獣鏡を出土した栗東市出庭亀塚古墳が、前方後円墳の可能性を残しているが、地形から判断されたもので、墳形に対する確実なデータは存在しない。前方後円墳となった場合も、前方部が短くなる可能性も読み取れる。従って、ここでは除外して扱うものとする。

(37) 森岡秀人「弥生集落研究の新動向」『みずほ』33 2000

(38) 細川修平「集う」『紀要』９号 財団法人滋賀県文化財保護協会 1996

(39) 用田政晴「三つの古墳の墳形と規模」『紀要』３号 財団法人滋賀県文化財保護協会 1990

(40) 都出比呂志ほか『雪野山古墳の研究』八日市市教育委員会 1996

(41) 現在湖西南部の首長系譜としては、和邇不ヶ谷１号墳、和邇大塚山古墳、春日山Ｅ１号墳、春日山Ｅ 12 号墳の系譜（順不同）と、壺笠山古墳、皇子山１号墳の系譜の二つが考えられる。

(42) 中西常雄「壺笠山遺跡・赤塚古墳の採集遺物」『滋賀文化財だより』208 号 財団法人滋賀県文化財保護協会 1995

(43) 尾張地域が、「前方後円墳秩序」の形成に関して、主体的に関わったとする論者は少ない。むしろ。前方後円墳に対峙するイメージが強いものとして扱われる点が多い。しかし、前方後方墳が「前方後円墳秩序」の形成段階からその秩序の一つとしての地位を確保している事実。大和（纒向遺跡）に大量の伊勢湾からの土器が搬入されている事実、尾張地域は古墳時代前期初頭以降も、これより以東への中心地としての地位を確保している事実など、「前方後円墳秩序」の形成に尾張地域が主体的に参加したと理解するほうが、より妥当性が高い現象と考える。この意味から赤塚次郎の研究（赤塚次郎「前方後方墳の定着」『考古学研究』43-2 1996）と、筆者の考えは基本的に矛盾しない。

なお、前方後方形の墓制を扱う多くの場合が、弥生墳丘

墓としての前方後方形周溝墓と前方後円墳秩序としての前方後方墳を一系譜の中で理解することに、方法的な問題があると考える。

(44) 前掲4) 近藤義郎

(45) 畿内（大和）地域は、それ以前から山陰-丹後地域と関係を持っていた点は否定しないが、この場合は、由良川－加古川の道を介した播磨地域を媒体としたものであった可能性が高い。当概期も当然このルートが第1であったと思われるが、丹後と尾張の交通体制の分断を考えた時、湖南地域を介在させることによってこそ、分断とともに、丹後－大和の関係を強化できるメリットは小さくなかったと考える。

(46) 広瀬和雄「大王墓古墳群の系譜とその特質（上・下）」『考古学研究』135・136 1987

(47) 細川修平「古墳時代における琵琶湖およびその周辺」『紀要』11号 財団法人滋賀県文化財保護協会 1998

(48) 前掲43）赤塚次郎

(49) 赤塚次郎（43）文献にも延べられているが、尾張地域を中心とする近畿以東の交通体制は、弥生時代後期頃までには完成し、一方、古墳時代も確実に機能して状況が窺える。直接的な対外交渉権をもたなかったための限界があったと考えるが、倭王権威とって、内部に存在する最大の脅威の一つであった点は、正しく評価する必要がある。

編集後記

本号では、縄文時代から古代にいたる７編の論考を掲載することができました。時代はやや古い方へ偏っていますが、中身は環境に関するものや、土器論、個別の遺跡にかかわるものなど多岐にわたったものとなっています。これらの論考が、私たち埋蔵文化財の調査に携わる者の一助となり、さらに文化財の保護・普及啓発活動の一翼を担っていくことを願っています。（☆）

平成14年(2002年) 3月

紀　要　第１５号

編集・発行　財団法人　滋賀県文化財保護協会
大津市瀬田南大萱町1732－2
Tel (077)548－9780・9781

印刷・製本　富士出版印刷株式会社
大津市札の辻４－20
Tel (077)523－2580 Fax(077)524－6668